（二〇二〇年度）

史学科・学科試問（六〇分）

（この問題冊子は9ページである。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。

二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。

三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。

四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。

五、**解答は、学科試問解答用紙に記入すること。**その他の部分には何も書いてはならない。

六、記述式の解答は、各解答欄にていねいに記入すること。数字、ローマ字については、一マスに一字とする。

七、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。

八、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。

九、解答用紙を持ち帰ってはならない。

十、問題冊子は必ず持ち帰ること。

問Ⅰと問Ⅱの両方に答えなさい。

問Ⅰ　次に掲げる文章をよく読んで、後の各問(1)～(6)に答えなさい。

十五世紀から十六世紀という時代は、歴史上の大きな転換期として久しくみとめられてきたといってよいであろう。今日でも一般的に用いられる「古代」「中世」「近代」という歴史の三分法がヨーロッパで登場したのはルネッサンスのころで、それ以後、ラテン語のmodo(今、最近)に由来するmodernなど「近代」にあたる語が、「中世」にかわる新たな人文精神を備えた自らの時代を指すものとして使われるようになった。現在の欧米においては、厳密な議論はさておき、常識的な用法としては、英語のモダン(modern)、フランス語のモデルン(moderne)などはいずれも、ほぼ十六世紀以降を指す言葉として用いられている。ただ、ヨーロッパ以外の地域を含む世界史の範囲でみると、「近代」という語の用い方は、かなり複雑である。(中略)

十九世紀以降欧米の影響を受けつつ成立した非欧米諸地域の歴史学において、これら諸地域の歴史上、「近代」という時代をどのように設定するかについては、いくつかの方法がありうる。第一に、ヨーロッパの「近代」に類似した現象が当該地域にみられるかどうかを基準とする方法がある。しかしそのなかでも、どのような現象を指標とするか――例えば、中央集権化、商業の発達、あるいはさらに民主主義的思想などのいずれを取り上げるか――によって、実際の時代区分はさまざまでありうる。第二に、当該地域の内部の状況は「近代」ヨーロッパと異なっていたとしても、接触・交流さらには支配関係(植民地化など)の存在をもって「同じ時代」とみなす方法もある。すなわち(中略)(あ)「共時性」に着目する考え方である。ただしこの場合も、どの程度の接触・交流・支配関係をもって基準とするのかは、かならずしも一定しない。

この問題は、世界史を範囲とする時代区分は可能なのかという難題として、歴史研究者を悩ましてきた。(中略)第二の考え方からみた場合、十六世紀が極めて重要な[1．かっき]であることは疑いない。例えばラテンアメリカの歴史にとって、スペイン・ポルトガルの支配下にはいって政治・経済・社会・文化状況が激変した十六世紀が大きな転換点であることは、いうを

またないであろう。十六世紀以降、西欧を「中核」とする資本主義社会システムがラテンアメリカをはじめとする他地域を[2．じゅうぞくてき]な「周縁」として包摂しつつ拡大してゆく、とするウォーラーステインの理論によれば、「中核」「周縁」双方を含む世界的な意味での「近代世界システム」が誕生するのは十六世紀ということになる。しかし一方、東アジアの中国や日本にとっては、(ア)十六世紀におけるヨーロッパ人との接触はそれなりの影響を与えたとはいえ、その衝撃力はラテンアメリカの場合とは比較にならない。中国や日本はむしろ、十九世紀になってから、本格的な「西洋の衝撃」に[3．そうぐう]したのである。欧米に範をとった日本の「近代化」、すなわち第一の意味での「近代」をめざす試みは、十九世紀になって始まった。とすれば、東アジアにおけるその間の三〇〇年間をどのように呼べばよいのか(中略)。

周知のように、日本史においては、安土・桃山時代から江戸時代、西暦にして一五六八年から一八六七年までの三〇〇年を「近世」と呼んで、明治維新後の「近代」と区別することは、戦前以来広く認められているので(中略)「東アジア史の『近世』問題」は表面上、すでに解決されているともいえる。しかし、この日本史上の「近世」という通用概念は、いわば慣習上の用法であって、(中略)日本以外のアジア諸地域については「近世」という語が定着しているわけではない。(中略)このような状況をふまえつつ、あらためて、世界史上の広義の「近代」を、十八世紀末から十九世紀前半を境に、「近世」と狭義の「近代」とに区別すること[が]主張[されている]。

一方、ヨーロッパ史においても、十六世紀から十八世紀の「三〇〇年」の呼称が問題となっていることに注目したい。(中略)旧来の教科書の筋書によれば、ルネサンスと人文主義、宗教改革により、中世は否定されて近代の「ヒューマニズム」と「個人」がうまれ、成立した。だが、その後三〇〇年近くたったころ、あらためて身分制と封建特権でがんじがらめの(イ)アンシャン・レジームが問題となり、これに対する異議申し立ての大団円として一七八九年にフランス革命が始まり、人権宣言によって「近代」が確立する、とされてきた。(中略)ここでいう近代が同じものだとすると、その「成立」と「確立」の間の約三〇〇年はいったいなんなのだろう。(近藤和彦『世界史リブレット一一四　近世ヨーロッパ』)

こうした疑問を踏まえた近藤の提案は、世界史的にみて、十六世紀から十八世紀を一つ重要な時代、「近世」(early modern)

としてとらえ、産業革命、フランス革命以後の狭義の「近代」と区別して扱うというものである。こうした時代区分法は現在、西洋史の分野でもかなり広く共有されているといえよう。

「近世」と狭義の「近代」を区別しようとする以上のような観点からすると、世界史的な転換期としての十六世紀の位置づけは、「近代」の開始期というよりは「近世」の開始期であるというところにあるといえるだろう。「近代」と「近世」とは、もともとの言葉の意味としてはほとんど違わないので、これは言葉遊びのようにみえるかもしれない。また、「近世」を、いずれは「近代」になってゆく歴史の流れの初期段階ととらえるならば、「近世」と「近代」とを区別する意味はあまりないと思われるかもしれない。ただ注目すべきは、(イ)「近代」と「近世」という語は、指している時代が異なるというのみならず、言葉の使い方そのものにかなり違いがあるということである。

「近代」という語はたんに何年から何年までといった時間の範囲を指す言葉ではない。「近代的」「近代化」などの用法が示すように、そこには、普遍的に通用する内容的指標――民主主義、合理精神、高度な科学技術、発達した工業、資本主義、など――が含意されている場合が多い。もちろんそれらの指標のなかでいずれを強調するかは人によって異なるだろうが、「その考え方は近代的でない」とか、「近代化をめざす」など〔と〕いう言葉遣いは、「近代」の内容を想定しないことにはそもそも成り立たないのである。そうした「近代」の意味には同時に、ある種の価値意識が負荷されている。その価値意識は、「近代的」「近代化」などの語が一般的にもつようなプラスの意味とは限らない。例えば、現在の日本で「近代主義者」などという場合は、西洋近代モデルを[4．きんかぎょくじょう]とするような人々を[5．揶揄]するやや否定的なニュアンスを含んでいるといえるだろう。というのも、「近代」という語には、西洋の衝撃のなかで「近代化」をめざしてきた非西欧地域の人々の憧れ、焦慮、劣等感などの入り混じったかなり屈折した感情が染みついているからなのである。

それに対し、「近世」という語は、そうした内容的指標や価値意識を必ずしもともなっていない。もちろん、日本に住む人々にとっては、学校教育やテレビドラマなどから得た知識によって、日本の「近世」の特徴はあきらかに思い浮かぶであろう。おそらく、他の地域の人々にとっても、それぞれの「近世」(すなわち十六～十八世紀頃)のイメージはある程度はっきりしている

であろう。ただ、それらに共通する「近世」の指標は何か、といわれても、すぐに回答することは難しいだろう。つまり、「近世」という語には、「近代」の場合に想定されるような共通の内容が[6．きはく]なのである。その意味で「近世」は、地域により異なる多様な内容を包含できるという意味でオープンな概念であるともいえるし、逆からいえば中身の薄いよくわからない言葉だともいえる。それでは、そうした[7．あいまい]さにもかかわらず、近世を近世たらしめるものがあるとすればそれは何なのだろうか。（中略）

一五七一年という年を世界史上の新状況の誕生にかかわらせて特筆した論文としてよく知られているものに、デニス・フリンとアルトゥーロ・ヒラルデスの共著英文論文「『銀のスプーン』とともに生まれる――一五七一年における世界貿易の始まり」（一九九五年）がある。なぜ一五七一年かというと、それは、一五七一年がマニラ建設とマニラ・ガレオン〔出題者注　メキシコとマニラを結んだ貿易。ガレオンは帆船の名称〕開始の年であることによる。（中略）マニラ・ガレオンの定期運航によってはじめて、アメリカ大陸とアジア、ヨーロッパ、アフリカ諸大陸を結ぶ恒常的な海上貿易の連環が完結し、「世界貿易」が始まった、とフリンらは論ずる。むろんそれ以前にも大陸間を結ぶ交易は存在したが、交易相手のすべてに決定的なインパクトを与えるような重要性をもって継続的に、そしてさらに、従来のミッシングリンク(う)であったアメリカ大陸―アジア間の太平洋航路の実現というかたちで、四大陸を結ぶ交易網が形成された点に、「世界貿易」の誕生たるゆえんがある、という。

このような議論は必ずしも新しいものではなく、フリンらが自ら引用するように、近世貿易史の大家であるチャールズ・ボクサーも、一五七一年という特定の年こそ強調しないものの、すでに一九六〇年代に同様のことをいっている。それにもかかわらず、同論文が英語圏の歴史学界で注目されたのは、商品流通と相表裏する銀流通への着目、そしてその銀流通の主導因としての中国における銀需要に着目した点に由来するといえよう。

この着眼点の新しさは、この時期の大陸間交易の発展について、主客逆転した見地から新しい面を開いてみせた点にある。（中略）かつてはこの時期の大陸間交易はもっぱら、コロンブスやヴァスコ・ダ・ガマに始まるヨーロッパ人の世界進出という側面からとらえられ、「地理上の発見」といった語が普通に用いられていた。その後、「地理上の発見」という語のもつヨーロッ

パ中心主義的バイアスが自覚されるにつれ、「大航海時代」などの語がかわって使用され、また、ヨーロッパ人を引きつけてきたアジアの生産物の豊かさ、質の高さの指摘を通じ、少なくとも十八世紀末頃まではアジア諸地域の経済力・技術力がむしろヨーロッパを[8．りょうが]していた、ということが強調された。さらに「大航海時代」という語も、ヨーロッパ人の航海活動を含意するということから、さまざまな民族の活動を包含する「大交易時代」といった語に取ってかわられつつある。しかしその場合でも、「ヨーロッパ人がアジアの豊かな物産をもとめてやってきて、現地の活発な交易活動に加わっていった」といった論じ方は、暗黙のうちにヨーロッパ人を主体とみなしていることに変わりはない。そこで焦点を当てられているのは、生糸や陶磁器を求めるヨーロッパ商人の欲望であり、中国への銀流入は、ヨーロッパ人の主体的活動の結果としてとらえられることとなる。フリンらの論文が逆転しようとしたのは、この暗黙の視点である。すなわち、（中略）(甲)アメリカ大陸及び(乙)日本の銀を大量に飲み込むことによって世界的な銀の流れを引き起こした中国の銀需要こそが、世界貿易の主動因であった。ヨーロッパ商人はたしかにこの貿易において重要な役割をはたしたが、それは仲買人としての活動にすぎない、というのである。

十六世紀後半以降のアメリカ大陸から中国への銀の流れ、及びそれにやや先立つ日本の銀の中国への大量流入、といった事実そのものは、すでに戦前から周知のことであり、決して新しい発見ではない。しかし、これを「中国の銀需要」という観点からとらえることによって、英語圏における「大航海時代」の通説的イメージを逆転してみせた点に、本論文のおもしろさがあるといえよう。「世界貿易」「銀の流れ」を中心にこの時期の世界をとらえるこの観点は、共時性を重視する先述の第二の考え方に近いが、それはウォーラーステインのように西欧による周縁地域の支配を骨格とする「世界システム」の考え方とはむしろ逆である。むろん、フリンらも、ラテンアメリカにおいてスペインが構築した収奪構造の存在を否定するわけではないが、それもまた、元をたどれば銀の終着点たる中国の銀需要が生み出したものだったということになるだろう。こうした主張は、ヨーロッパ中心主義批判が強く叫ばれている近年の英語圏の学界動向に棹（さお）さしたもので、やや極端のきらいもある。しかし、当時の中国が同時代のヨーロッパのような顕著な価格上昇（いわゆる価格革命）をおこすこともなく大量の銀を吸収したことは確かなので、いったいそれはなぜなのか、ということは興味深い問題である。

はたして中国は本当に銀の終着点だったのだろうか。フリンらの論文では、「底なしの銀の排水口」といった語で中国の銀需要の大きさを形容している。ただ、そうした銀需要がどのように形成されたのかという点については、銅銭の品質が一定でないため銀が選好されたこと、及び一五七〇年代前後に一条鞭法により税の銀納化がおこなわれたこと、を述べているにとどまる。興味深いのは、当時の中国の史料をみてみると、明朝の知識人も「排水口」に似た言葉を使って、銀の流れを表現しているということである。その言葉は「尾閭（びりょ）」といって、大海の底にあり海水を絶えず吸い込んでいると考えられた穴のことなのだが、その史料はつぎのように記す。

講和を結び互市を始めて以来、中国の銀で年々虜（北方異民族）のために費消されるものは数百万両であり、二十余年間の合計は二千万をくだらないだろう。この二千万両は、行ったきり戻らないこと、尾閭に帰するが如くであって、内地に還流してくることはないのである。官民ともに困窮するのも不思議ではない。（陳懿典「客問開鉱利害対」『陳学士先生初集』巻二八）

ここでいう「講和」「互市」というのは、（中略）明とモンゴルとのあいだの一五七一年の和議とそれにともなう馬市の開設にほかならない。つまりこの史料は、当時の中国人のなかに、中国の銀が北方に流出して戻ってこないことに危機感をいだいている人々がいたことを示している。ここであげられる流出量の信憑性はともかくとして、（中略）日本やアメリカ大陸から中国に運び込まれた銀の一定の部分がさらに北方の辺境地帯に流れ込み、のちに清朝として中国を支配することになるジュシェン（満洲）など、明朝の支配を掘り崩してゆく［9．しんこう］の商業＝軍事勢力を成長させていったことは、確かであろう。ジュシェン社会においても、日本の統一事業とほぼ同じ頃、薬用人参や毛皮の利益をめぐり激化する部族抗争を通じて、統一国家形成の動きが進んでいたのである。（中略）銀の大流通は、［10．かれつ］な軍事抗争や宗教弾圧と絡み合いながら進行していった。

（出典　岸本美緒編『歴史の転換期』より「6（1571年銀の大流通と国家統合）」山川出版社、二〇一九年、二～一〇頁。
なお、［］は出題者による補足や注である。）

(1) 文中、[1]～[10]の語句について、ひらがなは漢字に、漢字は読みを書きなさい。

1. かっき　2. じゅうぞくてき　3. そうぐう　4. きんかぎょくじょう　5. 揶揄
6. きはく　7. あいまい　8. りょうが　9. しんこう　10. かれつ

(2) 傍線部(あ)～(う)の語句から、**二つを選んで**、その意味をそれぞれ**六〇字以内**で説明しなさい。選んだ語句の記号を明記すること。

(あ) 共時性　(い) アンシャン・レジーム　(う) ミッシングリンク

(3) 傍線部(ア)の文章はどのようなことを意味しているのか。本文をふまえて**九〇字以内**で答えなさい。

(4) 傍線部(イ)の「言葉の使い方」の「違い」とはどのような違いか。本文の解説を**一二〇字以内**に要約して答えなさい。

(5) 傍線部(甲)「アメリカ大陸(の銀)」と(乙)「日本の銀」の**どちらか一つを選んで**、その歴史的意味を**九〇字以内**で説明しなさい。選んだ語句の記号を明記すること。

(6) 歴史学で用いられている「時代区分」について、その「有効性」と「問題点」について、自分で考えたことを**三〇〇字以内**で論じなさい。

問Ⅱ　次に掲げる歴史用語について、**二つを選んで、それぞれ九〇字以内**で解説しなさい。選んだ用語の番号を明記すること。

(1)　『日本書紀』　(2)　生類憐みの令　(3)　五大改革指令（一九四五年）　(4)　煬帝

(5)　李鴻章　(6)　元首政（プリンキパトゥス）　(7)　カール＝マルクス